歴史講座 平家物語

して、平氏一極の時代・・・平家物語の舞台が出来上がったのです。パパンパン

「源義経」と言えば、鎌倉幕府の将軍「源頼朝」の弟。「壇ノ浦の戦い」で平家を滅ぼした功労者であったにもかかわらず、兄・頼朝からの信頼を得ることができず、悲劇的な最期を遂げました。日テレのニュース調で言うならば、「剣術に優れ、戦術も天才であった義経に一体何があったのでしょうか？」となります。

源義経が誕生したのは、1159年（平治元年）。父は、平安時代末期の武将「源義朝」。母は「常盤御前」です。

義経が生まれたのは、まさに「平治の乱」が起こった頃。

父・義朝が率いる源氏が大敗し、この乱によって父・義朝は、平家の棟梁であった「平清盛」に敗れて、討死しています。

さらに、義朝の長男「源義平」は斬首刑で、次男の「源朝長」も討死し、3男の頼朝は伊豆に流罪とされました。幼い義経もこのときに殺されるはずでしたが、絶世の美女であった母・常盤御前が清盛に見初められて密約を交わしていました。常盤御前は、3人の子ども「今若」、「乙若」、「牛若」の命を助ける代わりに、清盛の妾となったのです。さらに、将来武士になって反旗を翻さないよう、3人の息子は寺へ出家させろという条件が言い渡されました。こうして、平氏一極の時代・・・平家物語の舞台が出来上がったのです。パパンパン

義経が「鞍馬寺」に預けられたのは、7歳のとき。義経は、15歳まで鞍馬寺で学問に打ち込んだものの、自らの出自を知り、清盛に対して怒りが込み上げます。ここだけの話ですが、源氏の血が途絶えることを憐れんだ僧侶が、義経の部屋に忍び込み、平家が敵だということを伝えたと言われています。

家系図をたどり、真実を知った義経は平家打倒の野心を抱き、夜ごと鞍馬寺を抜け出して、武芸に打ち込むようになったのです。

やがて義経の奇行は平家にも伝わることになったため、これはまずいと、16歳になった義経は、鞍馬山からこつ然と姿を消しました。

鞍馬山を出て、諸国を転々としていた義経は、奥州と京都を行き来する豪商人「金売吉次」と出会い、陸奥の話を聞くのです。陸奥は広大な国で、18万騎もの郎党がいると聞いた義経は、興味津々。吉次と共に、奥州平泉を目指したのです。

そして、奥州藤原氏の3代目当主「藤原秀衡」と出会うのです。秀衡は奥州藤原氏の全盛期を築いた人物。義経は秀衡に匿われ、秀衡のもとで武術を磨きました。

ミヤネヤ曰く、なぜ秀衡は、平氏の敵であった義経を匿ったのでしょうか？

それは、義経が兄・頼朝にとっても、平氏にとっても意味のある人物だったからです。義経を手中とすることによって、奥州を治める藤原氏は有利になるとの考えから、快く義経の滞在を受け入れました。

そんな中、平家の横柄ぶりに業を煮やし「後白河法皇」の息子「以仁王」が平家追討を発令。こうした混乱を機に、摂津源氏の「源頼政」に続いて、兄・頼朝が挙兵します。兄の挙兵を聞きつけた義経は、すぐに出陣。そして義経は、22歳にして初めて兄・頼朝と感動的な対面を果たし、ついに宿敵・平家滅亡のために動き出したのです。パパンパン

義経には数多くのエピソードがあります。

例えば「一ノ谷の戦い」では、突然崖を駆け下りて平氏本陣を奇襲。のちに、「鵯越の逆落とし」と言われる奇想天外の奇襲攻撃で平氏を大混乱に陥れ、同時に平氏側の陣に火が回ったことで敗走を余儀なくさせたのです。わずかの騎兵で義経が大勝利を収めた戦いでした。

瀬戸内海における「屋島の戦い」では、大役を任された義経は、暴風雨の中、通常3日はかかる道のりを船を使って数時間で移動します。

平氏側も義経達の船団が来ることを予想して陣を固めていましたが、まさかの平氏の背後に回りこみ奇襲攻撃。

本陣に着いた義経は、民家に火を放つことで大軍であることを装い、平氏をかく乱。平氏側が少人数で攻められたと気づいたころには、陣営は焼き払われてしまい、こちらも義経が勝利を収めました。

そして「壇ノ浦の戦い」では水軍を編成して、平氏と一騎討ちします。一時追い込まれた義経でしたが、船を操作する人員に狙いを定めて矢を射るよう指示をします。それが命中し、舵取りを失った平氏の船は沈み、形勢逆転し、勝利。ついに義経は、平家を滅亡させたのです。

まさに義経は負け知らず。圧倒的な強さで、たちまち有名になりました。それなのに、頼朝からは不信感を抱かれるようになったのです。

そのようになった理由は、主に4つあります。

・「兄の家来は俺の家来」と横柄な態度を取った
・奇襲攻撃ばかりで勝っていた
・三種の神器のひとつである「剣」を取り返すことができなかった
・後白河法皇から勝手に冠位や貴族の身分をもらった

さらに、頼朝の家臣「梶原景時」は、「最後の敵は義経なり」と頼朝をそそのかしました。こうして義経は、頼朝に朝敵と見なされるようになったのです。次回へと続きます。